

婦長のエニータイムエクササイズ！

プロローグ

何千年以上もの歳月と幾層もの世代を経て作り上げられた現代社会。人類史の発展において、その途上に生きる我々は今や高度な文明を手に行っている。目視できないほど遠方にいる相手との通信や、かつては対処法すらなかった病に立ち向かう精密機器の力と繊細なオペレーションスキル、そこまでいかずとも一粒で疾病を抑え改善できる薬もまた、類に漏れず人々の歴史の中で培われたものだ。

だが、そう成長した文明にて、人々は過去の人間が感じようもなかった様々なストレスを日々抱えている。農耕社会が形成された頃には想像さえできなかった現代のデジタル社会では、一日のうち何時間と同じ体勢で座り続け、デスクとお尻が離れなくなっている事もよくあるだろう。ただ座ってタスクをこなしているだけなのに、身体は思った以上に疲労を溜め込んでおり、その疲労の捌け口を探すのに人々は躍起になるのだ。そしてある人は、冷蔵庫の扉を開いたと思えば、キンキンに冷えた砂糖大量使用の清涼飲料と、機械に頼れば簡単に調理が可能な高カロリー冷凍食品、終いには、とろけるような甘さが何百 ml という容器に凝縮された業務用アイスを抱えて食に耽るといふことも、人類全体で見れば珍しくはない。

無論、食によるストレス発散は手軽でありかつ他人に迷惑をかけない為、悪手とは限らないが、精神や肉体にかかった負担を、食べ物を口いっぱい頬張っては胃に流し込み、満足いくまで暴食を繰り返して解消する生活はいつか破綻を迎える。具体的にはそう、肥大化した人体を無理矢理に包み込んだ衣服の限界などなど。ボタンを弾きとばし、溢れだした贅肉がだらしなくも重力に負けてパンツやベルトに乗っている様もまた、破綻に含まれるのだ。

そして、ここ人理継続保障機関フィニス・カルデアにおいても、増えすぎたサーバント数の影響でしわ寄せを受け、日々のストレスを食にぶつける白衣の天使がいた。これは、たったの一年間で体重を元の 3 倍以上にも膨れ上がらせ、精巧に磨き上げられた美を厚い脂肪で覆い尽くす程の激太りを遂げた彼女の物語。彼女がいかにして太り、いかにして減量を「試みた」のかを綴る—

第一節 増えた負担と増える食欲

魔術によって世界を一般人の知らないところで支えるカルデアは、現在大きなトラブルにも見舞われず、時々発生する人類史の歪み、すなわち特異点の修復と機関運營業務にあたっている。良く言えば平和、悪く言えばスパイスの無い通常営業の日々だが、それでも特異点修復に着手し問題の現地に足を運ぶマスター・藤丸立香は余力があれば新たなサーバントの召還に励んでいた。その結果、カルデアにて召還されたサーバントは既に 300 を

超え、人口密度で言えば、極地にその場を構えるカルデアは職員を合わせてみても、軽く日本の農村を超える密度に達していた。となると、そこまでの生命の維持には相応の労力が要されるわけだが、特にこの大所帯で悲鳴をあげつつあるのがカルデア医療チームなのだった。

「サーヴァント No.326、問題なし…。No.327 も状態良好…。次は職員…んぐう～、はぁ…。毎日ではないとはいえ、毎週全人員のメディカルチェックはやはり骨が折れますね。“骨が折れる”…？いえ、なんでも。骨折患者が今日も現れないことを願います。貴方も備品整理はほどほどに、休息を」

白を基調とした清潔感のある一室で、壁にかけられたモニターから顔を離してはぐっと腕を頭上に伸ばして小休止に入る彼女こそ、この日運命を大きく変えられる白衣の天使、フローレンス・ナイチンゲールだ。彼女の伸びは数秒続いたのち、元の体勢へと戻され、白衣とは名ばかりの真っ赤な衣装の乱れを雪のように白い手で細く正したと思えば、業務再開へと至る。

「婦長も、俺の事は大丈夫だから少し休憩したら…？昨日だってコーヒーに頼って夜遅くまで仕事してたよね？…よいしょっと、ふう」

ナイチンゲールが身体を向けている壁とは反対側に位置する医務室の棚に、カルテやら効能の軽めな薬やらを仕舞い、整理に励んでは額に浮かんだ汗を拭う立香の心配を、真面目な彼女はそう簡単には飲み込むはずもない。

「いえ、私は結構。この地に生きる全ての命は私の管理によって今も健康そのもの。ここで私が羽目を外せば、そのツケは後の私のみならず、いつか急な病として誰かの身に降りかかる事でしょう」

「『だから今はこの書類の山を…』ってことか…。まあ無理だけはしないでね。俺はいつでも婦長に手を貸せるけど、婦長自身の仕事は俺にはどうにもできないくらい大変な仕事だろうし」

それぞれの業務をこなしながら、目こそは合わせずとも、まるであとどれほどの量の紙がナイチンゲールの机上に残されているのかを察しているように立香は言う。その推察は的を射たように、医務室の責任者たるナイチンゲールの手元には過去一年以上分もの身体データが詰め込まれた何十人の紙カルテが山となっていた。

「あっ、そうだ、婦長って何かお菓子とかデザートとかで好きな食べ物ってある…？」

「急に何を？そうですね…私はそこまで甘味と縁がなく、特に砂糖は個人差こそありますが依存症状の元ともなるので、進んで自ら摂ることは…。強いて言えばファッジなら、このカルデアでも一度頂いた事はありますが」

それまでのお仕事ムードを一転させるような明るい声色で食べ物の話を始めた立香に、彼女は一瞬、下まぶたに疲れの陰を覗かせた目元の反面、曇りない紅色の瞳を丸めて驚きつつも、真摯な返しをした。普段こそ、シャープでどこか冷徹さを相手に感じさせるアイラインの彼女だが、意表を突かれたり油断したりした時に見せる表情は少女のそれと言っても

過言ではない。

「やっぱり？あんまり食べないだろうとは思ったけど、ちゃんと自己管理して自分にも甘くないところ、婦長らしくて俺も見習わなきゃな〜」

今まで背を向け合って作業していた状態から、くると振り返っては笑顔をちらつかせる立香。ナイチンゲールに尋ねた時点で、彼女が甘いものを好んで食べない事は分かっていたようだが、彼は作業の終わりと同時に業務に励む婦長へと歩み寄っていった。

「おっ、あと5人分！仕事が早くてホントに凄いよ…！」

「い、いえ…この業務ももう長く続けていますので、慣れていて当然です。貴方も備品の整理でお疲れでしょう、あとで携帯用アルコールスプレーを部屋にお送りします」

冗談なのか本気なのか分からないプレゼントの告知に苦笑いを浮かべざるを得ない立香だったが、彼と婦長の付き合いは既に長く、もはやツッコミを入れる事はなく華麗に(?)彼は本題へと話を進める。

「あ、ありがとう…ははっ、あー、でさ、普段食べないっていうので無理じゃなかったらなんだけど、この後ケーキでも食べてほしいな〜と思って…。実は昼にキッチンでお皿洗いを手伝ってたんだけど、その後ブーディカさんに賄いでケーキもらってさ。あまりに美味しかったからレシピを聞いて俺も作ってみたんだよね」

「貴方が？意外…、あっですが、そうですね…訂正します。人材の足りない部署にわざわざ赴き、自らの身を投じて働くとは、やはり貴方は私たちの司令官に相応しい。現にこうして、私の下にも雑用であっても補助に来てくださっているのですから。では、そんな貴方の好意を謹んでお受けして。今夜はケーキを頂くとしましょう」

珍しく口角が上がっている婦長を視界に映し、立香は少しテンションが上がった。珍しくというのも、本当に珍しい頻度であり、彼女がほほ笑む姿など見られるのはかなり貴重な出来事であった。加えて、普段は食べない砂糖菓子をあの健康狂人とも言えるナイチンゲールが口にしてくれるという。立香は一目散に医務室から廊下へと通じる扉へ駆けていく。

「いいの！？やった…！多分婦長、頭使って脳に糖分が足りなくなってるんじゃないかって心配だったから、食べてくれるの嬉しいよ！今キッチンの冷蔵庫から取ってくるから、少し待ってて！」

喋りながら走っていく立香の声は、扉が開き彼の姿がナイチンゲールから見えなくなるまで医務室内にも大きく聞こえていた。「廊下を走るのは怪我のもと」と言いたくなる気持ちを抑え、婦長は再び自身の机へと身体を向ける。残りの書類数から推し測って、恐らくマスターがこの部屋に戻ってきた時には丁度全てが片付いているだろう。白衣の天使は疲れが少し紛れたような笑みを浮かべて紙面の数字をモニターに反映させ始めた。

「全く…貴方のそういう素直な所が、サーバントを惹きつけるのでしょうか…ふふっ」

§ § §

「お待たせ…！はぁ！はぁ…！ケーキ、持ってきたよ！」

ちょうど10分が経過した頃、ドアの向こうからバタバタと足音を立てて走ってきたかと思えば、扉が開いた先に見えた彼の姿はかなり息が上がっており、汗に塗れていた。軽いランニング感覚であったのだろうが、サーヴァントと職員を合わせれば500人近い施設にてキッチンと医務室を往復し、かつ帰路に関してはケーキを持っての道のりだった為、神経を使い、比較的汗を描きやすい状態だったと言えよう。

「お帰りなさい。まずは息を整えてその汗をこのタオルで拭い…、ちょっと待ちなさい。その手に持って、いや、抱えている大きな箱は…何！？」

今までに見た事がないほどに婦長が動揺しているのも無理はない。マスター・藤丸立香が運んできたのはただのそれではなく、一般的な誕生日ケーキの直径を倍にしたような大きさのホールケーキだった。

「言ってなかったっけ…？レシピを聞いたは良いものの、食べるなら婦長とシェアして食べたいなぁと思って、ちょっと大きめのサイズで作ったんだ、あはは…」

「このサイズのケーキに使われている砂糖の量は一体…と、とりあえず、良いでしょう。さあテーブルは既に洗浄済み、後は貴方が座るだけです」

たじろぎつつもすぐに事態を理解した彼女は、立香にタオルを手渡すと仕事用のデスクとは別の円形テーブルの下へ向かい、椅子を引いた。案の定、テーブルの上にはティッシュが一箱と皿、そしてフォークと切り分ける為のナイフが既に用意されている。医務室という比較的病人がメインだが人の出入りが多い部屋故、食器等の備えは行き届いていたのだろう。

「あぁ、ありがとう！じゃあ、失礼して…」

「お待ちなさい」

「えっ？どうしたの？」

「座るだけとは言いましたが、肝心な事をまだしていないでしょう」

「…あっ、手、洗ってきます…」

もてなしの様相から一転、流石は白衣の天使。衛生管理には抜かりがない。

「先に切り分けておきますよ、八分の一程度のサイズで貴方も食べるでしょう？飲み物は紅茶、そうね…ディンブラあたりでいいかしら…？」

立香が手を洗いに行っているうちに、婦長の顔くらいなら容易に沈み込むような大きさの生クリームとスポンジの塊に包丁を入れていく。バーサーカーのクラスにあるまじき綺麗な包丁捌きで八分の一に切り分けられたケーキが二つ、別々の皿に乗せられ、更にマスターの返事が聞こえると、ティーカップに紅茶を注ぎ始めた。

「ごめん、婦長。わざわざ切り分けて飲み物まで用意させちゃって…でもすっごく良い香り！」

水気を多少帯びた手をこすり合わせながら、申し訳なさそうに遅れてきたマスターにただ一言「どうぞ座りなさい」とだけ伝え、彼女は先に席へ着く。二人の席はちょうど向かい

合わせになっていた。

「頂きます」「いただきます！」

シンプルイズベストを具現化したような純白の洋菓子に二人は同時に、フォークを通す。クリームとクリームの間でフォークが沈み込む事で溝ができ、やがてスポンジの層に達すると一口大にケーキが分割される。流石はカルデアのキッチンスタッフであり、多くの命を食で支えているブーディカの教えなだけある。料理に関しては経験の浅い立香でさえ、その指南によってここまで上品なケーキが作れてしまったのだ。

「あむっ…、…！美味しい…貴方、良い腕をしているのね」

「んくっ…、あ、ありがとう！自分でもびっくりするくらい美味しくて…、ごくっ。婦長にもそう言ってもらえるなんて思ってもみなかったよ！」

作り手である立香自身もその味に驚くほどの出来栄であり、言ってしまえばあまり味の方の期待はしていなかったナイチンゲールは、マスターに対する認識を改めるに至るほどだった。

「はふっ、…んっく、もう食べ終わってしまったわ…ご馳走様。残りは…そうね、貴方がせっかくこうも美味に仕上げてくれたのだから、明日以降にでも、頂くとしましょう」

普段から甘味とは縁遠いと言っていた彼女はあろうことかマスターより先にケーキを食べ終わっていた。口直ちに紅茶を楽しむ様子は十分な満足感に包まれているようで、後から食べ終わった立香には、彼女の日々の疲れを少しでも癒す事ができたと感じられた。

§ § §

「今日は無理言ってケーキまで食べてくれてありがとう！少しでも疲れを癒せたみたいで良かった！俺にできる事はあんまりないかもだけど、また何か手伝える事あったら言ってよ。じゃあ、おやすみ！」

「準備は婦長にさせたから片付けは自分が」と、そう言って食器洗いを引き受けた彼は皿からカップ、包丁に至るまで使ったものを全て洗い終えた後に、数刻のコミュニケーションを経て、自室へと帰っていった。マスターが今日の業務を手伝いに来たのは夕方5時。今の時刻は既に日付が変わる手前の11時半となっていた。こんな時刻に甘い甘いケーキを胃袋に収めてしまった事に、口には出せない罪悪感をナイチンゲールは抱きつつ、それでもどこか自分の中で精神的・肉体的負担が和らいだ感覚に高揚していた。

「さて…寝る前にはサーヴァントとはいえ歯を磨かねば。口内雑菌はこの手で滅するのが私の使命！」

先程までマスターが皿洗いをしていた医務室の流し場に向かうと、彼女は素早く歯ブラシを手にとると、口内の洗浄に取り掛かる。シャカシャカという一定のリズムを奏でて、如何にも「歯を磨いている」という音を5分ほど発したら終わり。部屋の明かりを消すと、彼女は徐にベットへ歩み寄り、そのまま倒れ込むようにして白い羽毛の塊の中へ落ちていっ

た。

数分後、壁に掛けられた時計の秒針が彼女を寝かせてはくれない。部屋の明かりは全て消したはずなのに、彼女の目は冴えてしまっていた。

ぎゅる、ぎゅるるるるる…

どこからともなく聞こえてきたまるで何かの鳴き声のような音は、全く聞き馴染みのない音だった。

ぎゅ、ぎゅる、ぎゅるるるる…！

二度目の轟音は一度目より更に大きなものとなっていたが、そのボリューム故にどこが出どころなのかはすぐに分かった。自分の胃袋からだっただけだ。英霊となって以降、空腹とは縁が切れ、胃袋が鳴くなどない事だと思っていた。しかし彼女の腹は今にも三度目の訴えをしようとしている。一体何故。思い当たる節などないに等しい。むしろ先程ケーキを食べたばかりなのに。…いや、もしかして、甘い誘惑の塊とも言えるケーキを堪能したからこそ、身体が更なる甘味を求めているのか。そう彼女が考え出した頃には、もう我慢の限界に差し掛かっていた。

「うう…こんなにお腹が、空くなんて…ダメよ、もう。あんなに大きなケーキがまだほとんど残っているのに…、さっき食べたばかりなのに…、まだ食べたいなんて…」

そう言葉を発するも、残っている理性とは反するように身体はベッドから起き上がり、一歩、また一歩と、普段は体調不良者の為の水分しか入っていない小型の冷蔵庫へと近づき、この夜に限って特別に仕舞われている残り四分の三が残った特大のホールケーキを取り出す為、扉に手を掛ける。

「一口だけ…それだけ食べたら、今日はもう…」

冷蔵庫の扉が開くと、中からはケーキが放つ甘い香りが婦長の鼻を目がけて飛んでくる。一度呼吸をすると、その誘惑は彼女の理性をかき消すようにし、手をそのままケーキへと向かわせた。

はむっ…んう…あむっ、ほむっ…んくう…、はあ…あと、あとひとくち、だけ…。

んぶっ…ぷは…、かおに、クリームがついてしまったわ…、あとで、あらわないと…。

そのまえに、もうすこし…、あむっ、んく、はむっあむう…あぁ…

テーブルにも着かず、ただ小型冷蔵庫の前に座り込んで、中から取り出したケーキを手づかみで形を崩しながらも口へと運ぶ。無論、手と口の周りはクリームとスポンジの一部で塗れているが、そんなことはもう彼女にとってどうでもよかった。「これで最後の一口」そう思いながらも、いざ一口を頬張り喉を通すと、すぐさま次の一口が欲しくなってしまう、結局最後の一口はケーキを全て食べ終えた時のものとなった。

「ふう…んぐう…つぶはっ、全て、食べてしまったの…？私が…？こんな時間にそんな、身体に毒…だけれど、私はサーヴァント…大して問題、ない…、なんだか、眠く…」

全てを胃に収めた後になって漸く我に返った彼女は、ぽっこりと膨らんで如何にも食べたものが詰まっていると言わんばかりのお腹を目の当たりにし、自分がした事を把握する。

初めての経験で表現しようのない感情になりながら、急激な糖分摂取により反動のような眠気が彼女を襲い、そのままベッドへ戻る事もできず、クリーム塗れのまま眠りへと落ちていったー

第二節 糖分の鎖、食い込むベルト

運命の日から二週間。先週は急な特異点発生で医務室へは立ち寄れなかったが、今週は婦長の仕事を手伝えると思ひ、ケーキの感想を改めて聞く為にも立香は足早にナイチンゲールの待つ彼女の自室へと向かった。

「こんにちは、婦長。先週は手伝えなくてごめん！今日は最後まで手伝えると思うから部屋、入るよ」

三回ノックした後に彼は廊下の扉越しにナイチンゲールへと話しかける。普段であれば「どうぞ」などの簡単な返答があるものの、今日に限ってはまだ何も返っては来ない。心配した彼が再度声を掛けようとした瞬間。

ドンッッッ！

何かが衝突したのかとさえ思われる鈍い音が、部屋の中から廊下にまで響き渡った。当然そんな音は日常生活の中で出るはずもなく、彼は中の状況がどうなっているのか瞬時により一層気になった。その為、こうした時の為のマスターの権限、カルデア内部からの破壊工作やサーバントの精神異常による暴走への対策として携帯している道具の一つ、全ての英霊の自室の鍵として使用が可能なマスターキーをカルデア制服の右ポケットから取り出し、扉へとかざした。ロックが解除され、扉が自動で開く。その先に彼が見たのはちょうど彼の身長ほどの大きさはあるであろうダンボールの箱とフローレンス・ナイチンゲールその人だった。

「大丈夫、婦長！？今、凄い音したけど！？…というか、そのダンボールは何！？」

すぐさま部屋の中で佇む女性へと駆け寄ると、心配の言葉と同時に謎の箱が存在している事について尋ねる。一方、ナイチンゲール自身からすれば、自分が雑務に取り掛かっている間に急にマスターが現れて、かつとんでもない形相で迫ってきたのだから、驚くのは必然であった。

「マ、マスター！？貴方、なぜそんなに慌てて…。少し落ち着きなさい。あまり気を荒げでは身体に悪いでしょう、さあ深呼吸…すう、はぁ…」

マスターに肩を掴まれて動揺したのも束の間、彼女は立香の方の心配をし、リラックスを持ちかけた。どうやら医務室内の状況としては全くもって緊急性はないらしい。深呼吸の最中に立香が確かめると、大きな箱の正体はファミリーサイズの冷蔵庫が入っていたものであった。

§ § §

「いやあ、驚いたよ。地響きみたいな音がしたと思って入ってみたら、まさかただ冷蔵庫を床に置いただけで、しかもちょっと手が滑って床に落とすように置きちゃっただけだったなんて…！」

先日の手伝いよりも三十分早く、今日のタスクを消化でき、時計の短針が11時を超える前に医務室を立ち去ろうとする立香が、始まりの出来事を回想する。要するに彼が過剰に反応し、過剰に心配して押し寄せただけだったのだ。

「え、ええ…心配させてごめんなさい。冷蔵庫程度であれば私一人で設置するのは容易いからと…」

一般女性であればあり得ない事だが、彼女は英霊でありかつ狂戦士のクラスのサーヴァント、ベッドの一つや二つは軽々と投げ飛ばし、過去には僅かな時間だったがあのゲーティアとさえ拳で戦う事が叶った力の持ち主。そんな彼女の試みであれば何も冷蔵庫を一人で設置しようとした行為に問題はなく、ただ彼が一人の男として気になったのは「なぜ今更、今までの小型冷蔵庫からファミリーサイズの大型冷蔵庫に、この医務室のものを替えようと思ったのか」だけである。それを立香が婦長に尋ねると彼女から返ってきた応えは至ってシンプルなものであった。

「そうね…貴方にはケ、ケーキの恩もありますし、いいでしょう。実は最近、疲労を食事で癒す事に快感を得てしまって…。その為の食糧の備蓄には以前の冷蔵庫ではサイズが足りなかったのよ。…ああ、自分でも嘆かわしいわ！食事に走る事で私自身を慰めようだなんて…これではまるで不健康への道を直進しているようなもの…」

恥ずかしそうに冷蔵庫の設置理由を告げた彼女は、半ば自暴自棄に近い様子で自らの行いを嘆くが、ただ大きさが足りなかったから家電をサイズアップさせたというだけであって、マスター・藤丸立香にとってはナイチンゲールの行いは大して変なもののように映らなかった。

「なるほどね、なんだ、そんな事だったんだ…！婦長がそうしたいと思って自分で決めて自分で動いたなら、特に俺がどうこう言う事じゃないから気にしなくていいよ！それに、前はかなり疲れも溜まって大変そうだったけど、今の婦長は少し柔らかい印象になってむしろ前より健康になったと思う！」

そう、彼女の雰囲気はどこか柔らかく、更に言うなら丸くなって肌にはツヤがあるように彼の目には見えていた。少しばかり服のダボついた様子が緩和されムチムチとした外見、輪郭線はシャープなものからカーブが目立つようになり、血色はかなりの改善が伺える。二週間前の状態とは比べ物にならないくらいに健康そのものに近づいているようだ。だが、彼のその言葉を聞き、白衣の天使は更なる変貌を遂げる事になるのであった。

§ § §

「彼がああ言っていたのだもの、多少の食事くらいで悪影響は…」

時刻は深夜 1 時半。皆が寝静まったカルデアの一室で彼女は眼を覚まし、何度目かの夜食へ身を投じようとしていた。新調し、嘗ての倍以上もの食糧が収納可能となった箱の前で、彼女は立ち尽くす。脳内では先程聞いた『今の婦長は少し柔らかい印象になってむしろ前より健康になったと思う！』というマスターの言葉がリピートされて止まない。「食事＝ストレス解消＝健康の体現」やがて彼女の中でこの図式が形成され始め、手はそのまま冷蔵庫の中へと伸びていった。

「今日はチーズケーキ…チョコドリンク、口直しにフライドチキン…栄養バランスも重要でしょう、サラダにマヨネーズ…、いただきます…あむっんふ、ふう…！」

両手いっぱい食べ物や飲み物を抱えると、そのまま円形テーブルへと向かい、机の上にそれらをドサッと乗せる。到底一人で食べきるとは思えない量の食事だが、これが彼女の夜食、あの日から日課となったストレス発散の唯一の手段であった。この二週間で新たにカルデアに召喚されたサーヴァントは三騎。新規で召喚されたサーヴァントの身体データを登録するのは時間がかかると共に、それだけ彼女の体力を消耗させていた。その反動として、いつしかカルデア医療チームの責任者でもあるナイチンゲールは、ほぼ毎日のように 5000kcal を優に超えるような夜食を自身に与えるようになっていた。

「あむっ！…んう…はむっんぶう、はあ、ほむっ！…のどがかわいてしまったわ…

じゅる、じゅぼぼぼぼぼ！…ぶはあ…あむっ、んふうはむっあむ！」

左手にはカットされたチーズケーキが素手で、そして右手にはタレと油の染みついた如何にも高カロリーなチキンが握られており、甘いものと脂っこい濃い味のものを交互に頬張っては背徳感と、ストレスから解放されていく快感に、以前の婦長から一回り大きくなったその身をうずめていく。そして手に持っている食べ物のどちらかを食べきると、すかさずチョコドリンクに手を伸ばし、糖分の塊をストロー越しに摂取するのだ。そしてまた次の食べ物を握る。この繰り返しが一時間以上続いていく。

「んぐっ…ぶはあ…もう、あと半分しか…そんなに食べてしまったなんて…まだ全然…ふう…そろそろ、外さないと…」

食糧の山がその高さを半減させた頃、折り返しを悟った彼女は腹部を圧迫しだした存在を気にし、衣服を弄り始めた。彼女が外したのは赤い上着のボタンとスカートのホック。途端、今まで布によって覆い隠されていた柔肌が空気に触れる。コルセットの役割を果たしていたとされるスカートはホックが外されると、ずっとその拘束を止め、床に落ちていく。上着の方はボタンが外された事でせり出す腹部によって持ち上げられ、やがて腹部は覆われる事無く丸見えの状態に至る。

「あむっ…ふひゅ…んぐっ…ぶはあ…♡この栄養が全て私の血となり肉となり魔力となり…より一層の健康に…♡もっと食べないと…まだ食べられるでしょう…？私の胃袋なら…むぐっ、じゅるるる、ぶはあ…♡」

顕わになった腹部の盛り上がりは胃に食べ物が詰め込まれた為に生じているのではない。

その肌は柔らかく、恍惚の笑みを浮かべながら腹部へと触れる手は、撫でたかと思えばせり出したお腹を持ち上げ、また更には脂肪によって保たれた柔らかさを堪能するようにぎゅっと摘まむ事をして、片手で食べ物を口に運び、もう片手で自らの腹を弄る段階へと達していた。その姿にもはや嘗てのナイチンゲールの面影はなく、健康を意識しつつも、それ以上に食への執着と依存が勝っており、食こそが全て健康へと通ずるのだと盲信している。

そして更に時計の長針が一周した頃、机上に山のように乗せられていた食べ物はその食べかすや包み紙、空の容器だけを残し、全て一人の女性の胃袋へと収められていた。

「ぶふう…ふはぁ…も、もうたべられないわ、げんかい…。こんなにたべたのね…。ふ、ふふっ…♡」

より一層膨れ上がった腹部に目をやり、先程まで目の前にあったはずの食べ物が全て自分の身体に吸収されようとしている現状に喜びを感じ、柔肌を愛撫する。そして、暫くして動けるようになると、彼女はゆっくりと立ち上がり、重たい一歩を踏み出しながらあと場所へと向かった。

ギシッ、ギギギギギ…

両足で乗ると数秒のうちに液晶画面へ重量が表示される。部屋の片隅に置かれていたそれに体重をかけると、ピピッという機械音で測定終了の合図がされ、今度はその上から下りる。いったん下りた後に徐々にかがむようにして覗かなければ、食事直後の大きく膨れた腹が邪魔で表示が確認できないのだ。

「きゅうじゅう…、今朝は 80 キロ台だったはず…。肥満二度…でも痩せすぎよりは健康でしょう…♡」

短期間の内におよそ 40 キロ近い増量を体現したその身は、明らかにぽっちゃりの域を超え始めていた。丸顔に近づきつつある輪郭に、顎周りに蓄えられ始めた贅肉、胸部に至っては眼に見えて服が窮屈そうに肌を締め付けている。腹部は再三言われるように食事直後で大きく膨らんでおり、下着の上半分を覆っている。背中に關しては、以前まで存在していた背骨の縦のラインが消え失せ、代わりにうっすらと肉の段が形成され始めている。そしてそのまま下へ視線を移すと、そこには白のタイツに包まれながらも間に隙間のないパツパツムチムチな両脚が伸びており、ふくらはぎも嘗ての二倍ほどの太さに成長していた。

「ふう…ふはぁ…、もう動けないわ…横に、ならないと…」

満腹まで食べ続けたことで満足したのか、はたまたストレスを食で発散しきった事で眠気が急に訪れたのか、婦長と呼ばれるその女性は乱れた衣服のまま、まるでトドのようにゴロンとベッドの上に横たわった。

その日以降、あと数キロで大台の 100 キロ到達、そしてそれが更なる健康への道だと信じ食へより耽る事になったのか、それとも自身の姿を見せたくないという理性が働いたのか、彼女はマスターの来訪を断り、一年もの間、医務室から一歩も出る事無く、他者と一切の接触なく、一人で職務に励む事となったという一

第三節 半裸の肉天使

カルデアにおいて召喚されたサーバントが 350 を超えようとしている八月某日、マスター・藤丸立香はかれこれ一年以上姿を見ていない医務室の彼女に思いを馳せていた。それまでは特異点発生などの急用がない限り、ほぼ毎週といったペースで彼女の下へ赴き、主に夕方から深夜まで業務補助をしていたのだが、最近では廊下から扉越しに声を掛けても「結構。もう貴方の手を借りるまでもありません」と淡白な返事だけで追い返される始末だ。

「う〜ん、やっぱりあの時のケーキが不味かったのか…いや、それとも俺が変な事言ったからか…」

毎年夏恒例ともいえるラスベガスや無人島への職員及びサーバントを引き連れたレイシフトも、この年のマスターに限ってはうわの空。疎遠になってしまった彼女の事で頭がいっぱいになっていたのだ。そうしてあっという間に夏の恒例行事を終え、カルデアに帰還したての彼だったが、そろそろこの有耶無耶な関係に終止符を打とうと考えていた。

「…よし、今日こそ。ちゃんと話をしないと…」

医務室の扉の前に立ち、深呼吸をすると彼は意気込む。この一年で医務室へ用事があった訪れた職員やサーバントは皆、ナイチンゲールの医務室ではなく、パラケルススやアスクレピオスの医務室というよりはどこか研究室に近い雰囲気のある部屋への訪問を勧められ、もはや医務室には誰も立ち寄りなくなっていた。この日もまた、扉には「体調不良者等の健康トラブルに見舞われている方は以下の部屋へ」と書かれた案内が掛けられ、鍵は固く締められている。

「ナイチンゲール婦長、藤丸立香です。今日はちゃんと話がしたいと思って来たんだ。このドア、開けてくれるかな…？」

扉に顔を近づけ、中にいる彼女に聞こえるようにハッキリとした声量で告げた。だが暫く待てど返答はない。

「婦長？大丈夫？」

再度声を掛けると、何かこのままではマズいとでも察したのか、少し慌てた様子の声で扉の奥から返事があった。

「ミスター・藤丸！？…い、いえ、また来たの？私であれば、もう貴方に頼らずとも十分仕事もこなせているわ…！だから早く帰りなさい…ん、ふう…」

彼女のイメージからは想像もできないような慌てふためく様子が扉越しに廊下の彼へと伝わる。吐息交じりの声に、何かゴソゴソという物と物が擦れる音。「十分仕事もこなせている」というのは嘘ではないかというのは、いくら鈍感と言われる立香にも分かった。

「だけど婦長！今日は君と面と向かって話がしたいんだ。さっきから何か物音もするし、こっちから鍵開けて入るよ…？いいね？」

普段であれば、特にレディの部屋に急に押しかけて入室するなどあってはならない事だと自覚している立香だが、今日に限っては一年も扉越しの声だけで姿を見せようとしな

白衣の天使にしびれを切らし、目に見える緊急性はないにも関わらず、マスターキーの使用を厭わなかった。数秒のうちに鋼鉄の扉は横へスライドし始め、医務室の様子が彼の視界に飛び込む。だが、彼の下へ最初に飛び込んできたのは視覚的な情報ではなく、むわっとした上に甘いような、汗臭いような、人が長い間換気もせずにも最低限の空気の循環だけで籠っていたと思われる部屋の匂いだった。

「ふ、婦長、なんだか、凄くこの部屋、空気が悪いけど…平気？」

目を細め、制服の袖で鼻周りを覆いながら、彼は部屋の中にいるであろうナイチンゲールへ問う。健康に限らず神経質な性格が目立って見える彼女にこの部屋の空気が耐えられたものかと疑問を持たざるを得なかった。だが、一步また一步と部屋へ踏み込む立香が細めた目を開き視界にその部屋の様子を映し出すと、そこにはまるで赤いコートを着せられた雪だるまのようなフォルムの女性が立っていた。

「あ、ああ…貴方、なぜ…あ、あれだけ帰れと言ったでしょうに…！み、見ないで！」

念の為開くかもしれない扉を押さえようとしたのか、廊下へと通ずる扉に向かっていたであろうその雪だるま型の女性は、不運にも部屋へ入ってきた立香と正面から向き合う形で、一年ぶりの邂逅を果たした。

「え…も、もしかして婦長…？」

マスターの頭は混乱する。無理もない、最後に会った時には少しぼっちゃりしたとはいえ、ある程度健康さを感じさせ、それに整ったビジュアルは美女のそれであって、出る所は出て引っ込む所は引っ込んでいる、メリハリのある体型だった彼女は、そんな面影もない、相撲取りをも凌ぐ巨体へと成長していたのだった。

「こ、これは、そう…着こんでいるだけよ…！」

冷や汗を額に浮かべ苦笑いをしながら苦し紛れの弁明をする。だがそれが嘘なのは明白だった。鮮やかな赤い上着はボタンの一つ一つが悲鳴を上げているかのような状態で服にシワを作りながら留まっているが、大きく山を成す胸と腹部を中心に、その間からは今にも溢れ出さんばかりの白い柔肌が顔を覗かせている。袖を見れば、おそらくこの一年で新調すらしていなかったのだと思われるほどにギチギチに詰め込まれた、服のサイズに不相応なほどに膨れ上がった二の腕が隙間なく衣服にコーティングされているようなパツパツの仕上がり。そのまま視線を下すと、腰で履かれているはずのスカートが、まるで下っ腹を覆うようにへそで履かれておりカーテンを彷彿とさせるが、その側面を見るとゴムやピンで何とかその状態にとどめているのが立香の目でも分かった。そして下半身を見てみると、行き場を失いつつある贅肉が所狭しと密集しどっぷりと肉の詰まった太腿が、膝の辺りで段を作るように構えていた。当然、そんな爆弾のような太腿に隙間などなく、白のタイツは雪見大福を彷彿とさせた。

「…そんな冗談を…」

まだ状況の理解が追い付かないのか、作り笑いを浮かべる事もできずに立香は再び見上げた。彼の知っている医務室では、廊下へと続く通路は人が二人は難なく通れる幅で設計さ

れていたはずだが、それが嘘のように今の目の前の光景は、一人の大柄な女性によって埋め尽くされている。狭そうに壁に手を突いている彼女の指は一本一本がウイナーやソーセージのようにぷっくりとしており、こんな状態で医療など怖くて頼めそうもない。恐る恐る彼女の顔を覗けば、そこにはうろたえた表情以上に、肉の付いた丸い輪郭と顎のタプタプとした肉感が第一に印象に残る太り具合の英霊がいた。

「じょ、冗談！？わ、私は冗談など…！これは本当に着ぶくれしているだけd…！？」
バチッ！ミチミチミチッ！

どうにかしてこの状況を乗り切ろうとしたのか、着こんだ事で外見が変わってしまったのだとマスターに信じ込ませたい彼女は、二人の距離を縮める為に大きく一步踏み出したのだがその途端、偶然か必然か、HPゲージがミリ単位にまで擦り減っていた衣服のボタンたちが瀕死状態を迎え、弾き飛ぶ。そしてそれに留まらず、上着という拘束を失った上半身の肉が大きくせり出すと、その勢いでへそで巻かれていたスカートさえも破裂させられたように無念にも床へ落ちていった。

「んぐっ！嘘、でしょう…！？どうしてこんな時に…！」

足元さえ見えないほどの激太りを遂げた彼女の視点では、突然衣服が弾け飛んだ事に目を疑わざるを得ず、今まで暴食を重ねて作り上げたわがままボディは、もはや服というベールでは隠せないほどに大きく成長していたのだと、現実を彼女に押し付け、脱力の後に腰から床へその巨体は崩れた。

「ふ、婦長…そのお…なんと言いますか…」

突然の出来事に状況理解さえようやく追いつこうかとしていた立香は、目のやり場に困まりロクな声掛けすらままならない。そうした一方で、もはや隠しようもないのだと、座り込めば床に付くほどに膨れ上がった下っ腹の肉を摩りながら、彼女は覇気のない声を発した。

「そ、そうですとも…私は…ふ、ふふ、太ったのよ」

§ § §

力の抜けてしまった婦長に手を差し伸べ、魔術礼装の補助はあるものの一人で、巨体へと成長したナイチンゲールの腕を引っ張り立ち上がらせる。ただ座った状態から立ち上がったただけなのに、身体を上下左右に揺らすと全身の肉が連動するようにタポンタポンと波打つ。特に脂肪が溜まりに溜まっている腹部は、一つ一つの動作の度にへその形を大きく変えていた。

「そんな格好じゃなんだから…そ、そうだ、この後ろで着替えられそう…？」

立香は必死に彼女の乱れた軀体を見ないようにしながら、医務室の隅に立てられたパーテーションを見つけ、そこへと誘導を始める。問診の際に使っていた代物が、まさか巨体を覆いながら中で着替えをさせるのに役立つ日が来ようとは…。ノシッノシッという締め

のない足音が立香の後ろから聞こえる。かつて軽快なりズムで室内を歩いていた女性のものとは思えない。更にそれに加え、「すう…ふはあ…んふう…」という粗めの鼻息と口呼吸によって発される吐息が立香の首元にまでかかっていた。今まで見た事もないほどに太ってしまった者の息とはいえ、それがあ程度の年月を共に過ごした女性のものであるのだから、男の理性を揺るがすのは時間の問題だった。

「さ、さあ中に入って…！確かそこに予備の服とかあったり…は、はやく！」

半透明で外からはモザイク程度にしか中の者の姿を映さないパーテーションへたどり着くと、マスターはくるっと振り返ったと思えばすかさず巨軀と化した英霊の背後に回り込み、その中へと背中を押して入らせる。

ちらっと視界に入ったそのだらしのない姿が脳裏に焼き付いてしまったが、今はそれどころではないと彼女の背中を押す。否、背中というより背中にこびりついた肉、背肉をギュッとプッシュしていた。「背中に触れているのにこの弾力…」と沈み込む指の感覚でその柔らかさを知りつつも、男性としてかすかに残った理性をフル稼働させ、なんとか彼女を仕切りの向こうへと連れていくことに成功した。

「んっ…はあ…ふひゅう…ふはあ…、ミスター・藤丸。先ほどは取り乱してしまっておめんなさい…。それと、その…ありがt」

「お、お礼は良いよ！マスターとして当然の事をしただけで…それに、俺の方こそ、婦長がこんなことになってるなんて知らなくて…もっと早く気づいていれば…」

興奮を鎮めながら、己の不甲斐なさに反省する立香だったが、薄い壁を隔てた向こうから聞こえてくる布の擦れる音と、恐らく四苦八苦しているであろう女性の微かな声に気持ちを逆撫でられる。今はパーテーションにも背を向けているが、万が一好奇心や欲望が勝り半透明のその壁を視界に入れたら最後、その向こうで揺れ動く雪のように白くも膨れ上がった人のシルエットに、理性を保てる自信がなかった。

「ど、どうして婦長はそんなに…その…」

「ふう…無理に言葉にしなくていいわ。…でも、私がここまで太った責任、取ってもらわないといけないでしょうね…」

女性に「太った」という言葉をかけるのに抵抗を感じていた立香だったが、壁の向こう側から聞こえた「責任」という単語に身が引き締まる感があった。そしてそれは当然、彼の責任なのである。

「…貴方の作ったケーキが美味しかったから」

「え、ケ、ケーキ…？ってあの時の…？」

丁度一年前の今頃、日々の仕事に追われて疲労が溜まっていたナイチンゲールに立香が手作りで用意したホールケーキ、その事だった。

「あ、あの甘さに病みつきで…ふう…食べれば食べるほどもっと食べたくなってしまっ…気づけば他の食べ物を合間に挟みながら一日中…」

小さな声でこうなった経緯を説明する彼女の言葉を、立香はただ聞き入れるしかなかっ

た。そして、パーティーションが二人の存在を隔てて五分ほど経過した時、再び鈍い足音が部屋に響き始め、今度は彼女の方からマスターに問うた。

「こ、これしか着られるような服がなかったのだけど、どう、かしら…？」

チラッと姿を覗かせた彼女の姿は、布面積が身体全体の一割にも満たないのではないかとと思われるほどに露出がされた、いわゆる水着姿だった。

§ § §

「…！～ん！！全然ダメじゃないよ…！む、むしろ良いくらい！」

本来肌を、しかも常軌を逸したほどに贅肉が蓄えられた肌を曝している彼女の方が赤面していてもおかしくないのだが、なぜかマスターの方が顔を赤らめ、早口で言葉を並べる。彼は気づいてしまったのだ、ドアが開いて初めて見たその巨体、衣服を弾け飛ばし床に座り込んだ締めりのない姿、首元にかかる吐息と普段は味わえないような背肉の手触り。彼は十分なほどに、太りに太った目の前の彼女に心を奪われていた。

「い、良いのかしら…！？こんなに、不健康でぶよぶよになってしまった私が…！」

うろたえながら、大きく前に突きだしへそで二つの肉段を形成している自身の腹を掴み感触を確かめる彼女は、マスターの様子からまんざらでもない事を感じ取る。

「ふ、普段は食事で服が汚れないように、食べるときはこの格好をしているのよ…」

太っても清潔への意識は健在…なのか、むしろ食事で周囲を汚さない意識がそもそも欠如している時点で清潔感は損なわれているのか、ゴム故に伸縮自在である水着に、全身の肉を食いこませて立香に近づきながら彼女は言う。

「ふう…サイズ、測りましょうか…？」

その手には汗でうっすらと湿っているメジャーがあった。二人の距離は気づけば一メートルもない。動いた事で熱を発している彼女の身体は限りなく立香の身体へと接近していた。

「サ、サイズって…お、俺が測ってもいいの…？」

動揺を隠せないながら、立香は間違いのないように確認をとる。男の自分が、英霊とは言えこんな爆体の女性の肌に触れてしかもスリーサイズを知ることになるなんて。彼の心の声は恐らくこんな感じだったのだろう。恐る恐る彼女の手からメジャーを受け取り、測定の動作に入る。動きが非常にゆっくりとしている彼に婦長は耳元で告げた。

「最後に測ったのは…たしか一年前だったかしら…」

この一年間で自分がどれほど太ったのかを彼女がほぼ知らないという事実に、そのスリーサイズをこの世で自分が初めて知る事になるという背徳感が合わさり、立香の理性はジェットコースターの下りのような勢いで深淵へと落ちていった。

「さ、触るよ…」

伸ばしたメジャーを彼女の胸部に巻き付け始める。両腕を挙げてもらっても、垂れる二の

腕の贅肉によって脇は見えないどころか、汗の溜まり場となっているらしく、顔を彼女の身体に近づけると、脇の辺りから発せられているであろう汗の匂いに嗅覚が刺激させる。一方で、立香がそうしている時、婦長の方は自分の重く成長してしまった腕を肩の高さまで上げる事に必死になり、脂汗を浮かべていた。痩せていた頃は棚の上の備品を手取るくらい朝飯前だったのに、今ではそれもできそうにない。惨めにもプルプルと震え波打つ二の腕が、彼女の筋肉量の低下を物語っていた。

「あともう少しだから…我慢してて…」

喘ぎ声にも近い彼女の我慢によって発せられる声と、そして荒くなっていく息に彼が気づかないはずもない。背中にメジャーを回して背肉の段を考慮しながら測定をしていたが、どんと汗がその表面に滲んでいく。

「え、ええ…問題ないわ…んはっ♡」

問題ないと言いながらも脂肪を大量に蓄えた女性は我慢がならず、大きく声を漏らしてしまう。その原因は二の腕や辛さにあるのではない。メジャーが彼女のニップルを掠めている事があった。先端とメジャーが一瞬触れたような感覚、まるで指でツンと触られているかのような衝撃が彼女を襲う。初めて知った、自分がどこで興奮するのかを。

「162cm…す、すごい…」

立香がメジャーによる拘束を解くと、彼女は一気に持ち上げていた腕をだらんと楽にし、上がった息を整え始める。ビショビショと言っても過言ではない程にかいてしまった汗をタオルで拭くと、そのタオルは一気に水気を帯びてしまっていた。マスターの方はというと、これまでの生でなんとなく女性の平均的なスリーサイズは好奇心から知っていたものの、初めて自分の手で測定をした挙句、その相手がかなりの巨軀の持ち主であった為、このまま太り続ければ200cmにも届くかもしれないそのバストサイズに目を疑っていた。

「じまる…ミスター・藤丸…、ふう…、次はここでしょう…？」

思考が一時停止していた彼に婦長は、自らの腹部をぐにゅぐにゅと手で揉みながら声を掛ける。この実った肉体に彼が関心を示している事を悟った彼女は、恥ずかしさを押し殺しながら自身の腹肉を揉みしだいて彼に次の測定を要求していた。

「…！う、うん…いくよ…」

固唾を飲み、マスターは立て膝をついてへそで形成された二段の肉の間にメジャーを通し始める。人の身体にはこんな風に脂肪が付くのかと感心しながら、探り探りメジャーを巻いていくが肉段に溜まった汗と慣れない行為から中々進まない。すると、そんな彼の様子を見かねたのか、婦長はあろうことか自身の膨れ上がった腹に手を掛け、上段の肉を持ち上げ始めた。

「こ、これでどうでしょう…ふっ…んぐっ」

何十キロもの脂肪が詰め込まれているだろう腹肉を、先程まで酷使していた腕で持ち上げ、吐息交じりに婦長は言う。かき分けられた肉段の間から彼に見えてきたのは沈み込んだへそ。そして汗の香りが再び鼻を刺す。スリムだった頃は縦に伸びていたへそのラインが無

惨にも肉に押し込められて横へ潰れていた。恐らく数キロやそこら痩せた所でこのへそは日の目を見る事はないだろう。背中からぐるっと巻き付いた二段の脂肪のドーナツの間にメジャーを巻き付け、バスト以上に膨れ上がったウエストの数値を読み上げる

「186…」

胸より二十センチ以上まで厚い脂肪を巻き付けたその腹は、数値を知ることによって更に大きなものへと感じられる。それは彼女のマスターである藤丸立香が一人丸ごと巻き付いたとしても足りないほどの腹囲だった。細身であればバストサイズがウエストに劣ることなどあるはずもないが、こうして突き付けられた二つのサイズの大小差が、如何に彼女の暴食が結果として腹肉の形で身に蓄えられていったのかを物語っている。

「んっ…はぁ…はぁ…！そんなに太く…」

立香が腹に巻き付けたメジャーを解くと、持ち上げていた上段の腹肉をドサッと離し、重力に抗えていない状態へと戻す。その刹那、体の表面に付着していた大量の汗が床へ降り注いだ。ストレス解消として始めた食事がいつしか、太る事でより健康に至れると思い込むようになり、ここまでの巨体へ化していたのだが、現実の自分のサイズを知る事で、嘗ての健康観が脳裏に戻りつつあるのかもしれないし、そんなことはないかもしれない。ただ180センチを超えたウエストはいずれにせよ彼女にとって衝撃的な数値であった。

「お、お尻…いいかな…」

最後のサイズ測定に立香が声を掛けると、彼女は進んで自身の腹肉全体を下っ腹からかき集めるようにして持ち上げる。下っ腹で全く見えなくなっていた水着がうっすらと立香の視界に入る。土手肉で浮き上げられてはいるものの、しっかり履けているのは意外だった。

「は、はやく…ふ、ふひゅ…」

翌日の二の腕の筋肉痛はほぼ確定している婦長がか細い声で彼に訴える。ぶるぶると震える腕と腹がもって後数十秒である事を告げていた。

「よいしょっと…え、そ、そんな…」

半分収まりきっていない尻から身体を一周するようにして測定を終えた立香は声を漏らす。メジャーが示していた数値は見覚えのある186センチだった。

「私のお腹とお尻が同じサイズ…、んっ、ぜえ…ふはぁ…」

全く同じと言っていい大きさのウエストとヒップに愕然としつつ、先程以上の勢いで腹肉をその腕から解放する。ぜえぜえと切らした息を整えようと呼吸をするたびに、身体が膨れているように立香には見えた。上から162,186,186。どの数値も女性の平均サイズの数倍はある。ともなれば、そんな圧倒的サイズ感の身体がどれほどの重さを携えているのか、気にならずにはいられない。

「…婦長、体重計って最後に乗ったのは…」

「きゅ、きゅうじゅうキロ…90キロを超えた時に乗ったのが最後だったかしら…」

この時点で90はおろか3桁の大台は確実に超えている事は保証され、その重量が一体何百キロなのかという問題に昇華する。二人が辺りを見回すと、食べ物のパッケージや包み紙

が乗せられてほぼ埋もれている可哀そうな体重計が発掘された。

ギシッ、バキッ、ギギギギギ…バキッッ！

片足からゆっくりと体重をかけ始め、両足が全て機器に着いて全重量が掛けられると、悲痛な叫びが室内に響き渡り、やがてそれは断末魔だったのだと二人に知られる。

力の無いピピッという機械音で測定終了が告げられ、婦長がその上から下りると、見るも絶えない程に表面はヒビだらけに割れていた。測定上限は 200 キロながら、長く使っている為かガタが来ていたのだろう。これが最後の使用となった。

「182 キロ…だね…」

躊躇いながらも、その数値を有する本人よりも先にマスターである彼が数字を発音する。それに連動するように、彼女もまたリアクションを示した。

「…か、過重！？栄養管理をより一層心がけなくては…。まずは炭水化物に見合うだけのタンパク質を…ふう…ふひゅ…ぜえ…」

体重計を破壊したことに対して相当なショックを感じながら、どこかその事実を受け止められないのか、より多くの栄養素を摂る事で栄養バランスの均衡を保とうとする。その取り方は重く、動くたびに全身の肉が邪魔をしつつも、冷蔵庫へと向かっていた。

「ふ、婦長！そ、そんなやけ食いなんて…！」

冷蔵庫を開き、中にあるジャンキーな食べ物から甘いアイスクリームまでごそっと取り出しては口に運び始める彼女に、立香が静止を求める。

「あむっ、でふが、んぐっ、ぷはあ…こんなに太ってもう…私は「太りすぎ」にまでなってしまったわ…あむっ、ぷふっ…」

喉を通ったかと思えば次の食べ物を口に詰め込み、そのまま話す婦長に立香は触れる。

「だ、ダイエットしよう…！俺は婦長の事好きだけど、今のままじゃ婦長が自分の事を受け入れられなくなっちゃうよ…！」

「んぐっ、ごっくん…だ、だいえっと…？」

ここまで痩せるという選択肢が糖分及び食への依存で見つけられなかった彼女にとって、立香のその言葉は意外性を帯びていた。こんなにみすぼらしく贅肉に包まれた自分がダイエット…。そう彼女は悩んだものの、立香の真っ直ぐな言葉に感化され、決断に至る。

「…いいでしょう、ダイエットをして健康を取り戻します」

「うん！そうしよう！俺もできる限り手伝うから…！」

こうして、一年間でブクブクと太り切った半裸の肉天使が挑む、減量への道のりが幕を開けたのだった—

第四節 揉みしだけ、贅肉の塊

「それで、ここまで惨たらしく太りに太ったその方を、我らの下へ連れてこられたのです

ね…？」

カルデアに構えられたとある一室、医務室とは打って変わって明かりは壁に掛けられた松明型の照明のみの暗い部屋。現代らしさはあまり感じらず、かなり洞窟や秘密基地といった人目に付かない場所をイメージされて設計されたその部屋は、“一人”の暗殺者のサーバントが好んで暮らしている一室だ。髑髏の仮面に長いポニーテールの青い髪、鍛え上げられた躯体は暗殺者としての技量の高さを会った人間に印象付けさせる。

「うん、実はかくかくしかじかで…、百貌さんにしかできない仕事だなあと思って…」

これまでマスターと婦長の間起こった出来事を告げると、藤丸立香は年上の女性に対する上目遣いのような表情で彼女、百貌のハサンに仕事の依頼をする。百貌、すなわち百の貌を持つ多重人格の暗殺者。一にして群、一人の人間に宿った数多くの人格はやがて彼女の特性として顕現し、宝具「妄想幻像」として、各人格が個体となって現界する。

「ふはあ…ちょ、ちょっと、貴方…！こんなに動いたのは久しぶりで、少し休憩を…ぜえ、はふう…」

医務室からこの部屋まで数百メートルもあるかどうかの短距離移動に、ぜえぜえと息を切らした肉達磨、もといナイチンゲールは、太ももの肉が垂れて埋もれつつある膝にメロンパンのようにパンパンに膨れ上がった手をついて呼吸を整えるのに必死であった。一年ぶりの外出、廊下に出るだけですれ違った者から「あの太った人って…」と奇怪な視線を浴びせられるのではないかとおびえながら、しかしそのブクブクに太った肉体を衣服で隠そうにももう着られる服がない為に、申し訳程度の布面積しかない水着でここまで移動してきたのだ。彼女にとってこれほど太った事を後悔したのは後にも先にもこの時しかない。

「休憩って婦長、一度座ったらまた立ち上がるのに時間かかるんだから、このまま百貌さんが用意してくれた施術台まで歩こ？」

マスターの説得により、汗だらけの肉体を奮わせ再び半裸の肉天使は歩き始める。ノシッノシッとゆっくり進む先にあったのは、彼女の身体がすっかり乗りそうなほどの大きさのまさに施術台。

「どうぞこちらへ。あとは我らがマスターのご命令のまま、貴方の身にこびりついた肉の山、解きほぐして差し上げます故…」

再び息を切らし始めたナイチンゲールが施術台に手を掛けると、先程まで一人であった百貌のハサンは、元から顕現していた通称アサ子さんと、ナイチンゲールとは別の意味で豪快な恵体を持つ『怪腕』、全身を黒のローブで覆い隠した小柄な『迅速』、そしてこの空間に存在する唯一の癒しともいえよう通称ちびアサシンの四個体へと分裂していた。中でも『怪腕』は、一人では施術台の上に乗る事すらできないナイチンゲールの身体に腕を回し、軽々と200キロ近い肉の塊を持ち上げ、台の上に転がす。

「んっ、ふはっ…あ、ありがとう、大きな貴方。私を持ち上げられるなんて、良い筋肉量をしているわ…ふう…」

まな板の上の鯛のように横になってはゴロンと仰向けに寝転がり、息を整えながら『怪腕』

へのお礼の言葉を告げる。首についた脂肪で気道が塞がってしまわないかとマスターは心配したが、まだなんとか呼吸はできているようだ。

「……いいえ、我らに礼は不要」

数刻の間をおいた後、立香も初めて聞く事となったのだが『怪腕』は珍しく言葉を発した。元が一人の人間のうちに宿った些細な人格、それ故に謙虚であり、また他者から礼を言われるに値しないのだと自らを評価しているのか。そう立香が考えていると、今度は部屋の奥からアサ子さんが濁ったジェル状の液体が詰まった瓶を持ってきた。

『『迅速』、手を』

アサ子さんの一声で、ローブ内から『迅速』は骨の浮き出るほど細い腕を“彼ら”の指揮官とも言えるアサ子さんの前に差し出す。するとその手に、瓶から垂れだしたドロツとした粘性のある液体がかけられていく。

「ふう…その、貴方たち、もしかして…」

この後自身の身にされる事を察したのか婦長は寝転がった身をほんの少しだけ起こしながら、その場にいる全員を見渡す。その声にまず応えたのは、足元にちびアサシンがくっついて離れないアサ子であった。

「ええ、ご推察通り。これから我らは主の命令に従って、貴方のその身体全体をローションマッサージで揉みほぐしましょう」

「婦長、前もって言わなくてごめんね…！でも、もし言ったらお腹とか触られるの嫌でここまで来れなかつたらうし…、これで痩せられると思えばいいかと！」

申し訳なさそうに手を合わせて謝る立香を横目に、彼女はローションを手で馴染ませるアサ子、『怪腕』、『迅速』を見つめ、反抗を断念する。苦しい運動を何日何週間何か月としながら更に食事制限までして痩せるより、寝転んでいる間に贅肉を揉まれて瘦身効果を狙った方が、体力が減りに減った彼女にとっては良い手だと判断したのだろう。

「それでは、お覚悟を…」

ネチョツとした液体でコーティングされた三者の手が婦長のせり出した腹部という柔肌に触れる。

ぶにゅ、ぐにゅ、ぐぐぐぐぐ…、ねとっ…べちゃ、ぱちん

ハイペースでかき混ぜるように肉の山をかき分ける『迅速』と、彼に比べて比較的ゆっくりながら確実に揉まれている感覚を婦長に与えていくアサ子、そして二者のマッサージがされていない箇所を狙ってその大きな掌でがっつりと肉を掴み揉みしだく『怪腕』。その様子を見ていた立香はいつの間にか婦長の腹がスライムか何かだと錯覚していた。

ぼにゅ、ぐいっぐいっぐいっ、ねちよっ…べちゃっ…ぶにゅっ

バランスボールに負けず劣らずといったほどに膨れ上がったナイチンゲールの腹はやがてローションマッサージによって光沢を帯び、揉めば揉むほど変幻自在に近いまでに肉の形を変えていく。

「んはっ、ふひゅ…んぬう…♡はあ、はあっ…！」

ハサン達が入念に腹を揉む一方で、ただ寝転がっているだけの彼女はやがて、揉まれる痛さがアクセントになって余計に際立つ快感に声を漏らさずにはいられなく…。

「んぐう、ぷはっ、も、揉み過ぎよっ、そんなに揉んだら…んふう、はあ、ぷはあ…♡」
横たわった身体をクネクネさせ、あまりの気持ちよさに普段の表情へ戻す事ができない婦長はただただ快樂の沼でもがくしかない。

「ぶひゅっ…も、揉まれるのが、ここまでっ、気持ちが良いなんて…んはっ、んぐう…♡」
山盛りに蓄えられた腹肉が三人の手によってかき分けられては揉みほぐされていくにつれて、婦長は吐息の量を増やししながら、自身が墮落して蓄え続けた贅肉を他人の手によって解される快感を口にする。マッサージに励むハサン達が汗をかくのは当然だが、ただ寝ている間にマッサージされているだけの婦長の方が全身にローション交じりの脂汗を流していた。

「…アサ子お姉ちゃん、…したい」

狂暴な贅肉と格闘する事三十分が過ぎた時、アサ子の足元に隠れていた少女はボソッと声を発した。百貌のうち唯一といってもいい幼女の人格、ちびアサシンとしてカルデアの子供サーヴァントたちにも慕われている彼女は、小さな足を指差しながら、姉と呼ばれる存在を見つめる。

「はあ、はあ、いいでしょう…『怪腕』、『迅速』、我らの出番はここまで。あとはこやつに」

そう言うと、アサ子さんは他二人と共に数歩下がり、マスターに一礼した後姿を消す。恐らくローションと汗まみれになった身体をどうにかしに行ったのだろう。立香はここまで長く行われていたマッサージとそれに敏感に反応した婦長の様子に釘付けになっていた。

「…踏むね」

立香が気が付くと、ちびアサシンは施術台の上に立っている。そして彼女の近くにはローションの瓶。するとその小さな足を瓶に突っ込んだかと思えば、ローションまみれとなった足でそのまま婦長の腹の上に立つ。

ぶにゅっ、ぎゅっぎゅっぎゅ、ぼにゅ…

華奢な両足をローション漬けにして、その生足のまま贅肉の山を踏みつける。常人であればそんな状態の足でまともに立っている事すらままならないが、幼女であっても暗殺者の英霊、バランス感覚はかなり良いらしい。

「はあ、はあ…♡くすぐったいい…ふう…もう、限界…」

余分な贅肉は何一つついておらず 30 キロもないであろうちびアサシンはその全体重をかけて、婦長の腹をぶにゅぶにゅと踏んでいく。女兒の足についた細い指は、重さ 200 キロ近い爆体の女性が有する腹肉へ食い込んで、快樂に溺れていく婦長の吐息を更に濃厚なものへと変えていった。

§ § §

「婦長、大丈夫…？足元だいぶふらついでるけど…」

結局二時間にも及ぶ本格的なローションマッサージで全身の肉を隈なく解された彼女は、マスターが心配するように、鈍い足音を数秒に一度させながら壁に手を突いて自室への帰路に着いていた。他人に自分の肌を触られ、しかも太った事の証しである脂肪の入念に揉まれた経験は、彼女を大いに刺激して、施術をした百貌たち以上に疲れを顕わにさせていた。

「え、ええ…ふう…私も少々はしゃぎすぎました…」

もう誰もこの腹に触れてはいないと言うのに、一歩踏み出すたびに揺れる肉の存在がマッサージの瞬間の感覚をフラッシュバックさせる。まるで全身の肉という肉の表面が性感帯になったかのように、揺れて波打つだけで身体に快感が走る。だがそうして得た快樂を表情に出してしまえば、廊下をのそのそと歩く現在の状況ですれ違う職員や隣を歩くマスターに不審がられる。その為、彼女の興奮は心の内だけに秘められていた。

「ぜえ…ふう…もう、ここで、結構。ミスター・藤丸、今日は大変な一日にしてしまいましたね…ふう…」

あと十数歩で彼女の自室である医務室にたどり着こうというところで、婦長は立香の見送りの任を解く。人の通りがある廊下とは言え、万が一転んだ時に起き上げられるのかが危ぶまれる婦長を最後まで送り届けるのが、この日の立香に課せられた最後のミッションだったが、ここまでくればもう安心だろう。

「そう…？婦長がいいって言うなら、俺はそろそろ自分の部屋に戻ろうかな。もし何かあったら俺の部屋に内線なりしてくれれば、いつでも駆けつけるから」

そう言って彼はゆっくりとナイチンゲールの巨体から離れていく。時刻は深夜、 Teppen を回ろうとしており、今を生きる人間である立香にとってはそろそろ睡魔に襲われ始める時間帯だ。案の定、大きなあくびを一つすると、婦長の後ろ姿を気にしつつも、彼は自室へと帰っていった。

「ふう…やっど、着いたわ…ぜえ…」

医務室のドアがゆっくりと自動でスライドしていく。一年前までは軽い足取りで何の困難もなく往復していた通路が今は非常に長く感じられる。べっとりとした汗の感覚が肌に触れずとも自分自身で感じられ、マッサージ後にウェットティッシュで撫でるように全身を拭いたはずなのに、帰路でその分大量の汗をかいてしまった事が想像にやすかった。

「シャワーでも、浴びないと…ぜえ…べとべとして気持ち悪いわね…」

ドアのカギを締める事もせず、彼女は部屋の奥へ進んでいくと、例の布面積の小さいゴムの水着を脱ぎ捨て、シャワールームへと向かう。廊下とは違って、カルデアのシャワールームは完全個室設計である為、その出入口は 180 キロを超える巨体と化した彼女にとって、狭い以外の何物でもなかった。

「んっ、んぐっ、はあ…ふっ！」

正面から身体を通そうとしても、座りっぱなしだった生活とそれにより蓄えられた肉で

広がった尻、そして特大の腹がつっかえてしまうのは分かり切った事。肉が詰まって身動きがとれなくなった、などという事態を事前に回避すべく、彼女は初めから身体を横に向けて、巨体の右サイドからシャワールームへの入室を試みる。

「ぜえ…入れた…ふう…にしても、本当に、あつすぎるわ…」

元々52キロだった身体に約130キロ分の脂肪が巻き付いていると、体温の逃げ場はなくなってしまい、少し動くだけで過剰なまでの保温機能によって暑くてたまらなくなる。自分の身体から発せられる汗臭さは、この一年で慣れたものだと思っていたが、シャワールームという限りなく密室に近い小さな部屋では、その臭いは籠り、凝縮され、刺激の強いものとなっていた。

「改めて見ると、なんてみっともない…」

シャワールームに備え付けられた鏡に、嘗ての彼女からは想像もできない程に膨れ上がった全身の像が映る。最低限の衣服であった水着を脱いだことで、そこに映る女性の姿は全裸。特に胸に関しては水着による拘束があったからこそメロンのような大きさでも形を保っていたが、その拘束もない今、ただの脂肪の塊に過ぎない両胸のそれはどっぷりと垂れ、メリハリのかけらもない。

「だけれど…昨日より柔らかくなったかしら…？」

胸から腹へ、鏡に反射する自身の像への視線を下すと、徐に自身の腹を鷲掴みにする。両手ですべての肉を抱えきれぬわけもないというのに、脇腹から前へ肉をかき集めては少し持ち上げ、そして手を離す。当然贅肉はダボンと無力に垂れ下がるのだが、百貌によるマッサージを受けた結果、なんとなくだが脂肪に柔らかさが宿った気がした。

「ふんっ、んはぁ…ぜえ…♡んふっ、んしょっと、つぶは…♡ やはり…」

何度も自身の腹を持ち上げては落としを繰り返す。腹肉が自由落下をするのに釣られて、その重みで前に倒れそうになる事もあったが、そんなことはお構いなしに自らの腹肉を弄ぶ。シャワールームに響く水の音が彼女の興奮に満ちた喘ぎをかき消すが、婦長の内に生じた贅肉と戯れる事の悦びは消える事はなかった。

終節 運動+食事=減量？健康的自己肥育？

シャワールームにその恵体を収めてから数十分、全身から湯気を上げて婦長は狭い一室から出てきた。全く個人部屋にシャワールームが備え付けられているのが如何に便利な事か、全裸のまま床を水浸しにして、贅肉を纏った大きな身体をゆさゆさと揺らしては収納からタオルを探し出す。

「ぜえ…タオルくらい、持って入るべきだったわ…こんなに水浸しにして…」

自身の行いを反省しつつ、肉と肉の間をしっかりとタオルを通して拭いていく。へそ、脇、下っ腹、内腿…気にしていけばキリがないくらいに彼女の身体は汗の溜まり場が多い。その為、ちゃんと水分を拭きとらなければ、湿った状態が延々と続き、臭いの発生源となつてし

まう。

「はぁ…ふひゅ…こんな動作だけで一苦労するなんて…」

全身を拭き終える頃には彼女の体力は本日何度目かの限界を迎えていた。このままベッドへ向かおうか、そう思いつつも、全裸で寝るのは体調不良のもと。そう思い衣服を探すも、今現状で着られる服は先ほど脱ぎ捨てた水着しかないのだと思い出した。

「ぜえ、しゃがむのも、キツイ…わねっ、んぐっ」

テーブルに置けばよかったものを勢いに任せて脱ぎたての水着を床に散乱させたために、大きな腹が障害物となっている彼女にとってそれを拾い上げるのには一苦労。早く着て、早く寝てしまいたい。ヘトヘトになった身体は休養を欲していた。

だが休養はなにも寝る事だけではないのだと彼女は思ってしまう。水着を拾い上げた視線の先、そこには彼女が一年前に設置したファミリーサイズの冷蔵庫が構えていた。

ごくり…

疲れ切った身体が「早くよこせ」と養分を欲する。食べ物存在を思い出すまではそんな事もなかったのに、不思議なものだ。彼女は瞬きさえ忘れて、冷蔵庫のドアに手を掛けていた。

「運動後の食事は筋肉の育成に重要…。今食べても脂肪にはならないわ…」

それはそうかもしれないが、彼女がこの日体験したのはあくまでも運動ではなく、ごく短い距離の往復とマッサージ。消費カロリー自体はそこまで多くはない。だが自分が運動したと信じてやまない彼女にとって、食事をする口実ができてしまっていた。

がこん、どさっ

円形テーブルの上に栄養バランスこそは良いが尋常ではない量の食べ物が並べられていく。身体を動かした後の食事は健康に良い。そう思って疑わないまま、彼女は食べ物を口に運び始めた。

「はぐっ、んぐっ、んん〜♡やはり食べる事は心身を癒す効果が…」

「ごめん婦長！俺、ここにマスターキー忘れちゃったみたいで…！」

これ以上ない幸福を感じていたナイチンゲールは、突然の訪問者に全思考を強制停止させられた。

一度自室へ帰ったはずのマスター・藤丸立香は、もうすっかり夜中だというのに再び医務室の椅子に座り込んでいる。一年ぶりの邂逅でしかもその相手は激太り、そうした状況で混乱した彼は大事なマスターキーを医務室の棚に置いたままにしてしまっていたのだ。だが今の彼はその時以上に状況の理解が追い付いていなかった。ダイエットをしようと言っていた相手が、少し目を離れた隙に夜食を爆食い。偶然彼が引き返してきたからよかったものの、そうでなければ婦長は夜通し食に耽っていた事だろう。

「…で、運動したから今食べても太らないと思った、と…？」

「ええ、あむっ、ほうれふへ…んぐっ、貴方やアサシンの彼女たちの協力を無下にしてしまったのは申し訳ないですが…んぐっ、ろうひへも、ふはっ…どうしても、食べるのがやめ

られず…」

会話の途中だというのも気にせず、婦長は欲望のままに食べ続ける。おそらく無意識の行為であり、立香もそれを止める事があまり意味を持たないことだと感じ、放置していた。心なしか食べ物喉を通るたびに、彼女の腹部は膨れていっているように見える。

「じゃあさ、俺が毎日婦長の運動手伝うから、そしたら存分に食べてもいいんじゃない？ しっかり身体を動かせば、太るペースも落とせるだろうし、百貌さんもなんだか今日のマッサージ、楽しかったみたいだから、たまに手伝ってもらったりしてさ」

ナイチンゲールは当然、マスターに食べるのを我慢するように言われるのだと思い込んでいた為、食べる手を止めようにも止められないもどかしさを感じていたのだが、予想を裏切る言葉に、驚きのあまり手が止まった。

「う、運動すれば、食べても…」

運動という課題に取り組みねばならないものの、それをこなせば食事を楽しんでも問題ない。そう告げられた彼女は考え込んだのちに答えを出す。

「わかりました、…う、運動します…」

いつかのダイエット宣言の時よりかは覇気のない声だったが、今度は「痩せる為の行為」ではない。「このままハイペースで太り続けるのを少しでも抑える為の行為」、そして「婦長自身が少しでも健康に近い状態で食を楽しむ為の行為」なのだ。それにマスターの管理もある。前回よりも下がったハードルで彼女の運動と食事に囲まれた生活が始まろうとしていた。

§ § §

その日は朝からカルデアの廊下に地鳴りのような足音が響いていた。ドスドスッというその音が足音だと気づかれるのは、それが廊下の方から近づいては離れていくように動いて聞こえるからであって、一か所であり続けていたら何かハンマーでも使って手の込んだ工作でもしているのだろうと思われよう。おまけに、そんな足音が近づいてくるとやがて、ぜふう…はぁ…という酸素の吸引量と二酸化炭素の排出量が異常な数値をたたき出しているのではないかと疑われ得る荒々しい呼吸が聞こえてくる。

「婦長！あと往復二周…！そしたら今日の運動は終わりだから頑張ろう！」

スポーツフェアに身を包み、さわやかな外見でコーチングをするのは、カルデアに所属するマスター、藤丸立香。本来であればマスターとしての業務で特異点の修復や、カルデアスタッフとしての業務で雑務を担当する事が日課だが、最近は毎日こうしてホイッスルを首から下げてランニングの指南をしていた。そしてその相手とは…

「ぶひゅ…ふほっ、んはぁ…まだ二周も…、ちょっと休ませて頂戴…ふはっ、ぶひゅ…」

完全に息が上がっており、肉に埋もれつつもかろうじて分かる顎の位置が上へとむいてしまっているその人こそ、立香が日々運動の補助に励んでいる相手、白衣の天使・ナイチン

ゲール。かつては50キロほどの整った容姿で、巨乳でありながらウエストまわりのくびれ具合からまるでグラビアモデルかのようなプロポーションをしていたカルデアの医療スタッフ兼、バーサーカーのサーヴァントだったが、今ではどれも嘘のように、戦いの場に出る事もなく、ただ太りに太った巨体の女性と化している。

「はい頑張って頑張って！ちゃんと走り終わったら、ご褒美にチョコムース食べていいから！」

マスターから発せられたチョコムースという単語に、全身の肉を揺らしながら汗を床にまき散らして走る彼女は食いつく。どうも職員たちの噂では、彼女は甘いものに目が無く、特に砂糖がたっぷり使われた洋菓子の為なら、人前でその巨体を揺らす事も、数百メートルのランニングすらも苦ではないとか。その噂通り、彼女は先ほどまでのペースから一転、呼吸は荒くなったものの倍の勢いで廊下を進む。ただ、亀の歩くスピードが倍になったところでそれが早いのかというのは疑問視されるのだが。

ドスツドスツドスッ…！

「チョコ…ふう、コッ、ぶはあ…ムう、スっ、ふひゅう…！」

一步踏み出すたびに食べ物に関する妄想が彼女の脳内に拮がっていく。ホットミルクと一緒に食べようか、それとも更に追いチョコとして上からチョコソースをかけて食べようか…そんな味の濃い妄想に覆われながら、胸部よりも膨らんだその特徴的な二段腹を互いに互いがぶつかり合う形でバウンドさせ、走り続ける。

ドスッ…ドスッ…

「ここまで来ればゴール…！あと少し！」

チョコムースの魔法が半ば解けかかっているかのように数刻前の勢いは失われ、再び数秒に一步のペースへ逆戻りした彼女だったが、マスターの応援であと数メートルの距離を走り終えようとしている。

「あと、すこしで…ぜえ、ぜえ…チョコムース…ぶはあ…ぜえ…」

カルデアの廊下は館内の構造上、U字型でワンフロアを通して設計されているが、その廊下を5往復するというのがこの日の目標だった。そうした目標は、例えば立香自身が達成しようとするればものの15分やそこらで完遂できるだろうが、まるで身体全体のシルエットが球のように膨れてしまっている婦長にとっては1時間あっても足りないくらいに時間のかかる任務だった。結局、早朝から行われていたランニングが終わったのは、開始から1時間半が経過した時だった。

「はい、右腕上げて一、脇の下、拭くよ？」

濡れたタオルが数枚、机上に置かれた医務室で先程まで廊下で騒がしくしていた二人が時を同じくする。立香にとってはこの運動からの巨体の汗拭きをするという日常も早半年、初めのうちは慣れなかったが、一か月二か月とナイチンゲールの運動に欠かさず付き合ううちに、日課として彼の生活の一部となっていた。

「んふう…ごっくん、よいしょっと…どうぞ…」

右手に持っていたチョコムースを左手にあるスプーンで口へ運んだ後、空となったカップとスプーンを机の上に置き、空いた左手で支えながら右腕を上げる。といっても、その上がり具合は精々肩のラインまでで、頭上にまで上げる事はその重量故に不可能だった。微かに外気に触れる脇の肉。重なり合う肉の段は深いところほど汗が溜まっており、こうして少し腕を上げただけで、隙間から汗の香りが溢れ出し、巨軀の周囲に立ち込める。

「ふう…右腕おわりっと、あとはお腹かな…」

一枚のタオルに絞れば小さなコップなら満タンになるほどの汗をしみこませて、立香は脇の拭き掃除を終えた。

「み、ミスター・藤丸…こ、こんなことを聞くのも何だけれど…私、臭くなかったかしら…？」

口の周りに着いたチョコソースを指で取っては舌に乗せていた彼女は、彼の目を敢えて見ないようにしながら、顔を赤られて質問する。自分の臭いには疎いのが一般的とされているが、流石にここまでの図体で、しかも凝縮された汗の集合体が一気に解き放たれるとなると、自分の体臭にさえ気づかざるを得ない。現に彼女自身、脇を見せた時にツンとする刺激臭を感じ取っていた。

「え？婦長の臭い？…んん～そうだね、匂わないかって言うと嘘になるけど、別に俺はこれが婦長の匂いなんだ～っていうのでむしろ好きだけだな～」

さりげなく言ってくれるが、実際にそう言葉にしてしかも本心から言う人間は地球上にそういないだろう。首がどこか分からなくなるほどに顎や輪郭に肉を付け、更に品がなく膨れ上がった胸に、パンパンに肉の詰まった二の腕、そして特大の浮き輪のような肉が二段重なりあっている腹に、ベッドに座り込むとウエスト以上に拵がっている尻から太もも周りの肉、誰がどう見ても肥満体の女性かた繰り出される体臭を受け入れられる人物は限られている。だがそう限定的な人物の中に彼が含まれているのは、ひとえに彼が目の前の彼女に対して好意を抱いているからであり、その体型も魅力的ながら、体型を超えた愛情を感じているからであった。

「あ、貴方は全く、いつもそうやって、私に甘いよね…」

彼女が今どんな表情をしているのかは想像に任せるが、新しく水道水で絞り直したタオルを手を歩み寄ってくる立香に、彼女はお腹を向ける。パンパンに肉の詰まった手で背中から脇腹、そして前面へと皮下脂肪をかき集め、その肉量をアピールする。正面から見れば下着の存在が確認できないほどの肉量だ。

「さ、さぁ…好きなだけ、触ってもいいわよ…」

ここ半年で180キロ台だった体重を更に大台を超えた201.9キロにまで成長させつつも、日々の運動によって筋肉量はそこそこに保たれている彼女は、その肉体の所有権を彼に委ねる。そして彼が冷たいタオル越しに肌に触れてくると、ひんやりとしたタオルの冷たさなのか、彼の愛撫なのかは定かではないが、堪らない快樂に包まれていく。二年ほど前はカルデアに増え続けているサーヴァントの管理に心身共に消耗し、ストレス発散の為に食に走

っていた彼女だったが、今は痩せる事はできずとも、マスターと過ごす時間を手にいれ、かつ苦しくはあるものの運動とその後待つ至福の時間を楽しみに、第二の生を謳歌しているのがあった。